

[翻 訳]

## オーセンティックな複製としてのアブラハム・リンカーン

### —ポストモダニズム批判—\*<sup>1</sup>

エドワード・M・ブルーナー

遠藤英樹(訳)

ポストモダンの著述家たちによれば、ハイパーリアリティにおいて、複製はオリジナル以上のものとなっている。たとえばミュージアムは、実際のもの以上に生き生きとしており効果的である (Eco 1986 : 8)。Jean Baudrillardによると、アメリカはイミテーションを創りあげており、シミュラクルが完璧なものとなるのは、複製がオリジナル以上に「リアル」になる時なのだ (1981 : 41 ; あるいは Eco 1986 : 18)。Meaghan Morrisが述べているのだが、私たちがシミュラクルをもつようになると、「真実 (リアルであるかのような) は擬似的なもののイメージにおいて複製されるようになり、それが真実となっていくのである」(1988 : 5)。Umberto Ecoがアメリカについて論じているところでは、「過去は完全にオーセンティックなコピーにおいて維持され賞賛されている。すなわち複製こそが色あせはしないという考え方である」(1986 : 6)。「アメリカがリアルなものを求めており、それを獲得するため完全なる偽りを織りあげるといふ例をさがして、ハイパーリアリティへの旅へと」、Ecoは私たちに誘うのだ (1986 : 7)。

こうしたことは、単にポストモダンな、くだらないおしゃべりにすぎないのだろうか。BaudrillardやEcoの著作は、大陸の想像力をもつアメリカを「再発見」してきた多くのヨーロッパ人たちの饒舌と変わりはないのだろうか。

Baudrillard (1983) によると、現在のポスト工業時代において私たちは歴史の新しい局面に突入しているという。それは、情報の流れや複製のあり方が大きく変化したエレクトロニクス時代だと言われる。ルネッサンス期にあっては、本物とにせものがきちんと区別されており、工業化時代になると同じ物事が何度も反復されるようになった。そしていまのポストモダンの局面では、オリジナルや基準となる価値観、始まりといったものをもたない単なるシミュレーションだけがあり、そこではシミュラクルこそが真実になるという。BaudrillardやEcoにとって、アメリカはハイパーリアリティなのである。「アメリカは、オリジナルや神話的オーセンシィティといったものを何一つ創りだしてこなかったのだ。そこには過去や真実などありはしない。.....アメリカは永遠の現在を生きている。.....すなわち永遠のシミュレーションを生きているのだ」(Baudrillard 1988 : 76)。

本稿の目的は、BaudrillardやEcoのポストモダンのパースペクティブを批判的に考察し、文化はすべて絶えず創造され続けるとする構築主義的な立場 (Bruner 1984) から歴史における複製の見方を発展させることにある。これによって、オリジナル/コピー、オーセンティックなもの/オーセンティックでないものといった区分を乗り越えていこうと考えている。私の関心はポストモダニズム批判にあるが、しかしこの言葉は、建築から芸術、学問、ポピュラーメディアにいたるまで多様な意味合いがあるまま、とても曖昧に使われている。議論を明確にするため、私はポストモダニズムという言葉、特にその代表的な論客であるBaudrillardやEcoの著作にみられるいくつかの論点に限定したいと思う。もっと言えば、

アメリカにおけるコピーとオリジナルをめぐる彼らの仕事に限定してもよいとさえ考えている。ただあまり焦点が狭くなりすぎるのもどうかと思うので注意しておくが、ポストモダンの立場がいくら多様でも、シミュラクルの理論はその本質的な要素なのである。

またアメリカに関するBaudrillardやEcoの著作においては、彼らがオリジナルなものに対して理論的に挑みかかっているにもかかわらず、どこかで明らかにオリジナルなものを前提としてしまっている。彼らにとってのオリジナル、それはヨーロッパであり、アメリカは本質的にヨーロッパの周辺とみなされているのだ (Baudrillard 1988 : 76)。BaudrillardやEcoばかりでなく、Dean MacCannellやRichard Handlerといった研究者もまた、オーセンティシティに関する彼らの著作のなかで、オリジナルと複製を本質的に二分する言葉づかいをしてしまっている。Derrida (1974) によれば、こうした「あれかこれか」の二元論は西洋の形而上学においてつくられてきたものであり、両者は単に対立するものとしてではなく、一方が他方に優越するものとして考えられてきたのである。

こうした問題を考察するため、私は、あるエスノグラフィックな事例に目をむけようと思う。それは、イリノイ州の中央部にある歴史の名所、リンカーンのニュー・セイラムである。さらにニュー・セイラムをプロデュースしているミュージアムの専門家たちにも目をむけるつもりだ。歴史の名所というのは、複製、オリジナル、オーセンティシティといった問題に関するデータを収集するのに良い場所である<sup>1</sup>。というのは、ミュージアムの専門家たちは日々、こうした問題について議論をたたかわせているからだ。彼らには、歴史の名所を演出する責務がある。それゆえ展示を変え、新たな物語をつくりだし、解説者やガイドを訓練するとともに、彼らはつねにニュー・セイラムを構築し続けている。数ある歴史の名所のうちでも、ニュー・セイラムはとくに研究に適した場所であろう。というのは、ニュー・セイラム関連の文献で、この場所は「オーセンティックな複製」と呼ばれているからだ。「オーセンティックな複製」とはオリジナルなのかコピーなのか決められないがゆえに、興味をひく言葉である。私は、この言葉の意味について探求したいと考えている。

BaudrillardやEcoは、ツーリストや訪問客にとっての歴史的複製の意味について、ほのめかしはするが、明確に扱っているわけではない。本稿は、ポストモダニストが一般化していることのいくつかを認めていない。結論部分において私は、BaudrillardやEcoの見解と対照的な、ニュー・セイラムの意味に関する別の読みを示す。私の見解は、ツーリストをめぐるフィールドワークから生まれたものである。ここでは明らかに仮説的なものにとどまっているが、私は、名所に対する訪問客の意味づけに焦点をあてる立場にたっている。私の仮説によれば、ニュー・セイラムのツーリストたちは、(1) 過去を学び、(2) しばらく出会いを楽しみつつ遊び、(3) もっとシンプルだった過ぎ去りし時代のノスタルジアを消費し、同時に(4) 私たちがどれほど進歩したかという感慨を購入するのである。最後に、彼らはまた(5) アメリカを、そして、その価値と道徳を賛美している。こうした経験は、オーセンティシティの追求をこえている。ニュー・セイラムにおける経験は、アイデンティティや意味、そして愛着といったものを訪問客に与えるのだ。

結論で私は、ニュー・セイラムについて知りえたことをポストモダニズムや、アメリカにおける伝統・オーセンティシティ・名所の発明に関する文献に適用しようと思う。本稿ではポストモダンの状況をめぐるグランドセオリーをうちたてるよりはむしろ、エスノグラフィックの方法、それにパフォーマンスや実践の概念を利用しつつ、特定の事例をもとに新たなパースペクティブを提示したいと考えている。

## ニュー・セイラム

ニュー・セイラム<sup>2</sup>は、1830年代にアブラハム・リンカーンが暮らしていたイリノイ州に再建された村

とミュージアムから成り立っている (Thomas 1934)。たいていのアメリカ人なら知っていることだが、アブラハム・リンカーンは南北戦争時の合衆国大統領であり、奴隷制を廃止し、1865年に暗殺されている。おそらく彼は、もっとも偉大なアメリカ人たちのヒーローであり、リンカーンの生涯はアメリカにおけるサクセス・ストーリーのイデオロギーを具体化している。アブラハム・リンカーンは22才のときにニュー・セイラムにやってきて、そこに1831年から1837年まで暮らした。リンカーン自身の言葉を借りれば、彼は「一片の流木」のごとく「友もなく、無教養で貧乏な少年」としてここへ到り、もちまへの強い意志で懸命に働くことで、ニュー・セイラムをあとにした後、州都<sup>2</sup>で法律家となり、ついには政治家にまでなったのである。ニュー・セイラムで配られていたイリノイ州史跡保存局の資料には、「リンカーンのニュー・セイラム」(資料製作年月日、不詳) というタイトルで、以下のような言葉が書き連ねられている。

「6年間リンカーンはニュー・セイラムで過ごし、それが彼の人生においてターニング・ポイントとなった。何の目的もなく1831年に村へやってきた、ひよろひよろの若者は、確固たる目的をもち、法律家そして政治家となったのだ」。

同じ発想(テーマ)は、サンドバーグによる有名な伝記にも見うけられる。その中で彼は、ニュー・セイラムを「リンカーンの『母校(Alma Mater)』」(1954: 743)と呼び、その場所がリンカーンの「育ての母」(1954: 55)であると述べている。こうした物語には、Frederick Jackson Turnerの「開拓者仮説」が明らかに認められる。それによると、合衆国が荒野を開拓し克服することでつくられたのと同じく、リンカーンもつらい生活に打ち克つことで形成されたのだとされる。またアメリカが開かれた社会であり、日中は懸命に働き夜は学ぼうとする者ならだれでもアメリカン・ドリームを達成しようという考え方も、同様に明らかに認められる。こうしてニュー・セイラムはアメリカの市民宗教の聖地となっている。ここは、成熟したリンカーンが誕生した土地なのだ。ニュー・セイラムこそ、リンカーンの変身の地であり、その物語はアメリカそのもの、すなわち、ぼろきれをまとった者が豊かになり、丸太小屋に住んでいた者がホワイトハウスに住むにいたるというアメリカの神話なのである。

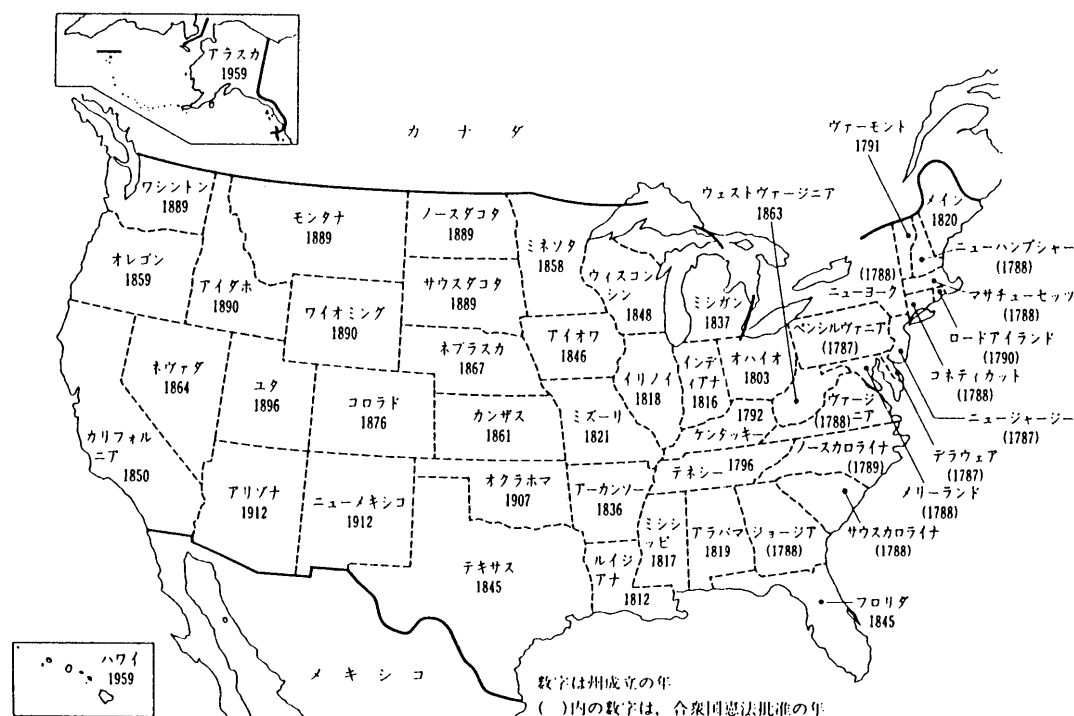


図1 アメリカの地図 資料出典：有賀貞・大下尚一，1979，「概説アメリカ史」有斐閣。

ニュー・セイラムは、イリノイ州の主要な観光施設であり、年間50万人以上の訪問客を有し、キャンプ場やピクニックコースを含む640エーカーある公園の中に位置している。この場所は、イリノイ州が所有する公共施設で、23のログハウスがあり、そのほとんどに解説者がいる。彼らはリンカーン当時の衣服をまとい、ツーリストたちを迎え入れ、1830年代の生活について語り、その家にもといた住人について話しをし、ツーリストたちの質問にこたえる。そうした解説はふつう、三人称でなされるが、実際はときに一人称になってしまったりする<sup>3</sup>。ここでは、民芸のデモンストレーションが行われており、また鍛冶、料理、鋤、毛糸織りや染物、さらにはロウソク、石けん、箒、靴、スプーンなどの製作を目にすることがで

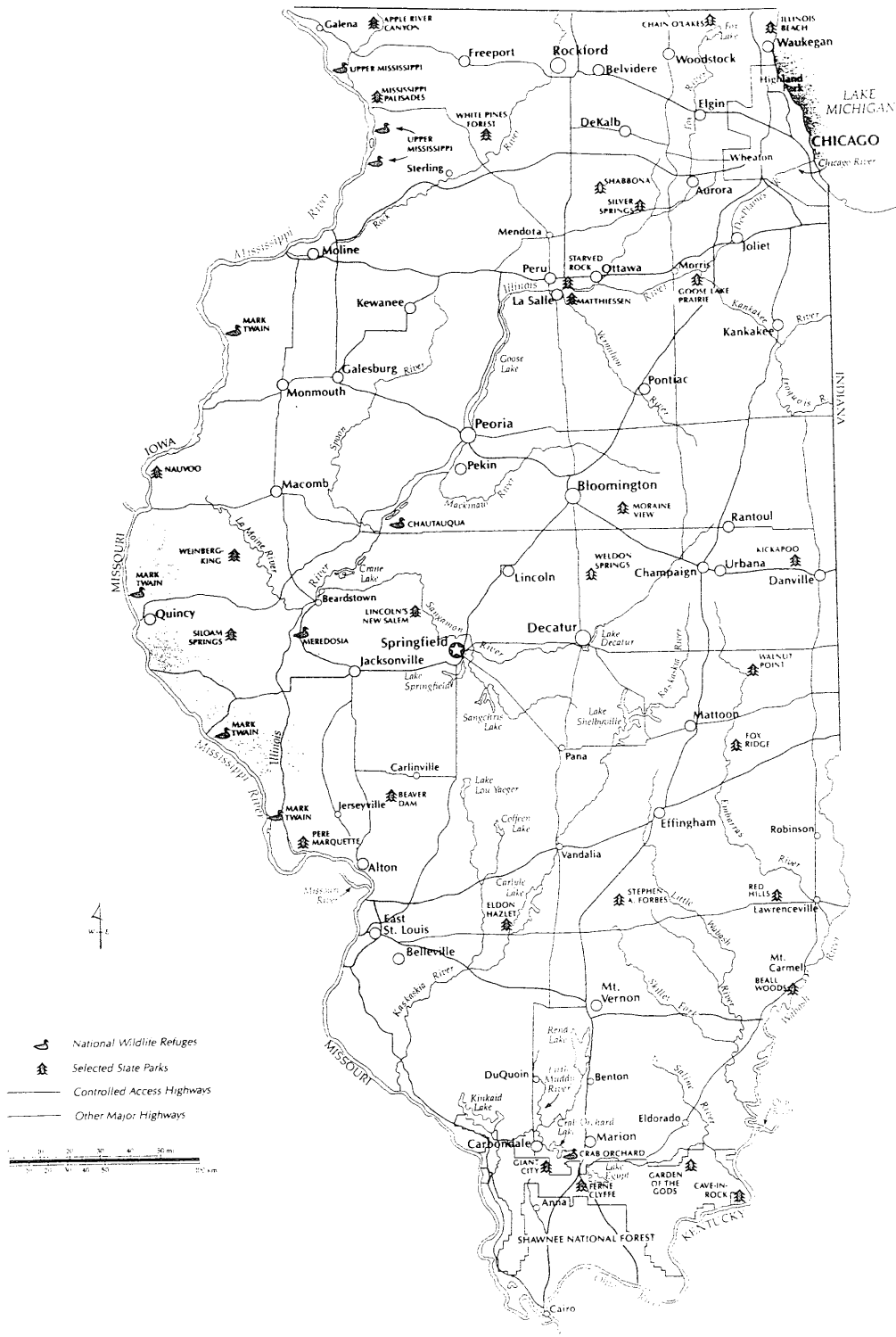


図2 イリノイ州の地図

きる。ニュー・セイラムは、中西部に再建された大草原の村のひとつであり、その意味でBaudrillardやEcoは正しいと言える。アメリカには再建された歴史の名所が数多く存在するのだ (Anderson 1984)。

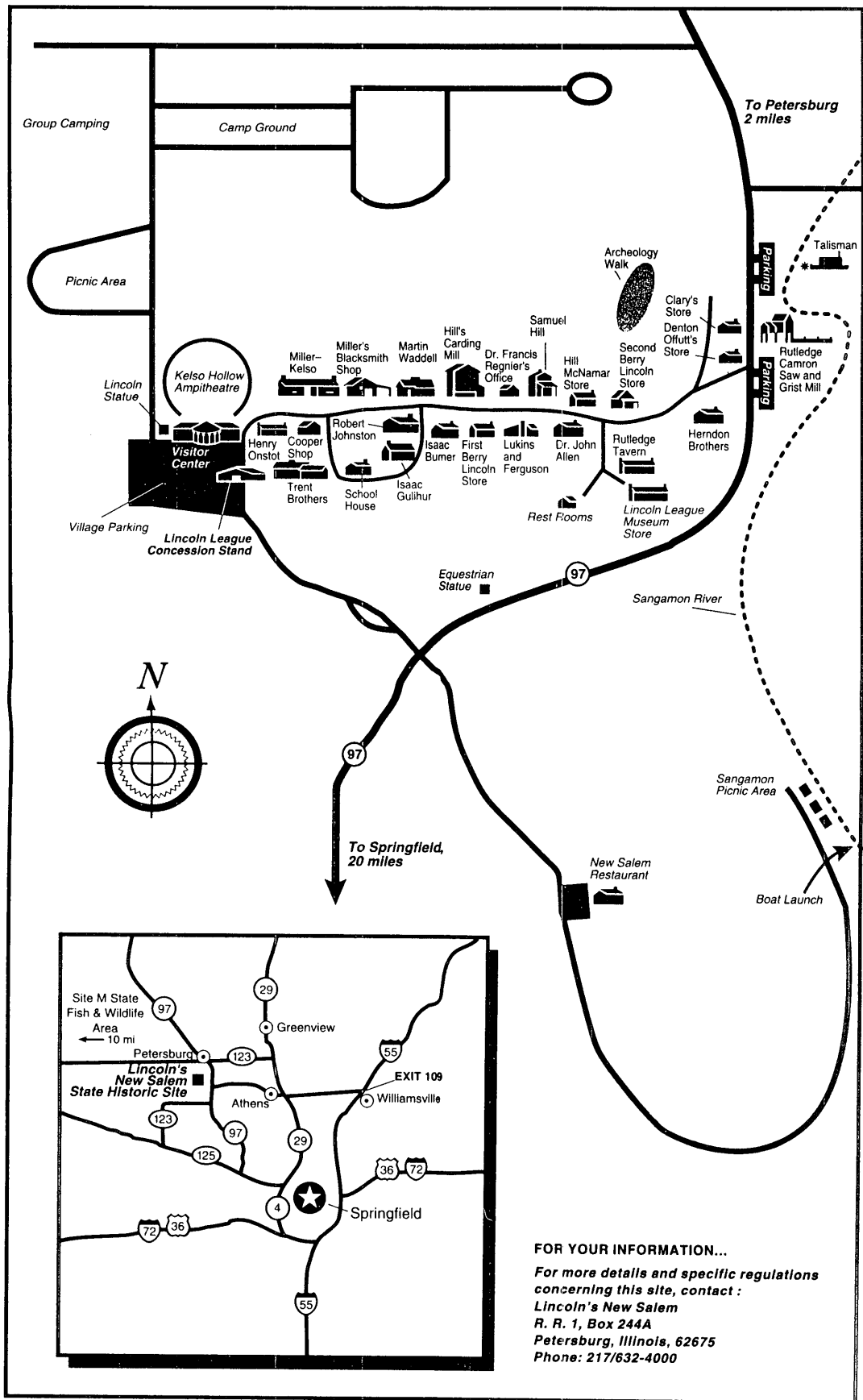


図3 ニュー・セイラムの見取図 資料出典：ニュー・セイラムの観光パンフレット



写真1 ニュー・セイラム



写真2 ニュー・セイラム内のログハウスにいる解説者

### オーセンティシティ、コピー、オリジナル

Ada Louise Huxtable (1992: 24) も述べているように、『『オーセンティックな複製』という言葉ほど危険で奇妙な言葉はない』。彼女は、コロニアル・ウィリアムズバーグ<sup>\*3</sup>について書いているのだが、この言葉は他の歴史の名所でもよく用いられている<sup>4</sup>。ニュー・セイラムは、そのパンフレットの中で「オーセンティックな複製」として描かれている名所のひとつである。これには、どんな意味があるのだろうか。私は、この問いに対して一般的な答えを提示するのではなくむしろ、ミュージアムの専門家たち、ニュー・セイラムのスタッフや解説者たちの言説に着目し、「オーセンティックな複製」という言葉がどのように用いられているのか考えようと思う。文化人類学者であれば納得してもらえらるだろうが、どのような表現であれ、その意味は言葉そのもの、あるいは辞書の中におさまりにかえっているのではなく、その表現を用いる人々の知覚や実践に依存しているものなのだ。

「オーセンティックな複製」という言葉によって、ミュージアムの専門家たちは、ニュー・セイラムが複製であってオリジナルではないと分かっている。しかし彼らは、そういった複製が1830年代の様子を伝えるという意味でオーセンティックであってほしいと思っている。ほとんどの者はTaylor and Johnson (1993) が「歴史的な本物らしさ (verisimilitude)」と呼んだものをめざしており、1990年代のニュー・セイラムを1830年代のニュー・セイラムに似せようとしている。この点でオーセンティックという形容詞は、「信頼しうる (credible)」「確かな (convincing)」といった意味合いをもち、これが大抵のミュージアムの専門家たちの目標になっている。そうして彼らは、歴史的な名所を一般の人たちに対して信じうるもの (believable) として創りだし、模倣による信頼感を達成するのである。これが、オーセンティシティの第1の意味である。

さらに進んで、ミュージアムの専門家たちのなかには、1990年代のニュー・セイラムがオリジナルに似ているだけでなく、完全なるシミュレーション、すなわち1830年代に対して歴史的に正確で真実のものだと言う者もいる。これが、オーセンティシティの第2の意味である。第1の意味では、本物らしさ (verisimilitude) を基礎に、1990年代の人間がニュー・セイラムの村にはいり、期待していた通りだとすれば、「まるで1830年代のようだ」と言うだろう。第2の意味では、真実さ (genuineness) を基礎に、村が実際真実のものでリアルに見えるので、1830年代の人間が「これはまるで1830年代のニュー・セイラムのようだ」と言うだろう。私の見たところ、ミュージアムの専門家たちは主として第1の意味でオーセンティシティという言葉を用いているようだが、時に第2の意味でも使われている。Handler and Saxton (1998:242) によれば、あらゆる歴史の実践家にとって、オーセンティシティとは正確無比なほどに同じであることを意味している。だがニュー・セイラムでは、必ずしもそうではない。オーセンティシティを

達成するためには、ニュージラムの専門家たちは、歴史の学問的成果に、さらには考古学的調査や当時の権利書、裁判記録、日記、手紙、新聞、その他記録されたものや人々の記憶、中西部にある他の村との比較—これらは学者や専門家に解釈されたものであるが—といったものに頼っているのである。

オーセンティシティには、少なくともあと2つの意味もある。第3の意味では、それはコピーと対比されたオリジナルを意味している。だが、この意味からすれば当然、複製はオーセンティックではありえない。しかしながらニュー・セイラムの歴史名所では、オリジナルなもの、オリジナルな住居があると主張されている<sup>5</sup>。そうしてオーセンティシティのauraは1990年代のこの場所にみちあふれ、オリジナルのもつ光彩は複製によって消されはしないとされているのだ。第4の意味では、オーセンティシティとは正式にオーソライズされ認可されていること、法的に妥当なことを意味している。この意味によれば、ニュー・セイラムはまさにオーセンティックである。それは、かつての古きニュー・セイラムの正式な複製、つまりイリノイ州が認可したものなのである。それはたぶん、州政府が認めた唯一のオフィシャルなニュー・セイラムであろう。この意味にあつては、オーセンティシティの問題はオーソリティの問題に変わっていく。ここでのより根本的な問題は、そこにあるものや場所がオーセンティックかどうかということではなく、むしろ誰がオーセンティックかどうかを決定するオーソリティを有するのかということである。つまり、それは権力の問題、言い換えれば場所の物語を語る権利を誰が有するのかという問題なのだ。ニュー・セイラムの言説をめぐってオーセンティシティという言葉が現われるようになった19世紀後半に、こういった問題も生じてきたのである。

1906年にWilliam Randolph Hearstがこの場所を購入し、地方のシャートクォー（教育振興団体）に土地を寄付して以後、ニュー・セイラムを再建しようという運動がその目的を達成しうるようになった。ニュー・セイラム再建が現実のものとなってきたのだ。そこで、1830年代のニュー・セイラムはどんなものだったのかという問題が生じてきた。この村は1839年にうちすてられ、それ以降1906年まで何の住居の跡形さえもない丘のうえの荒れ地にすぎなかったからなのだ。地方の歴史家、ジャーナリスト、政治家、企業家、ビジネスマン、かつてそこに住んでいた人びとの子孫、この場所の再建に関心を持っている周囲のメナード郡の住民、彼らはみな様々に自己の見解や関心を口にした。まさにオーセンティシティをめぐる、あれやこれやの議論が展開されたわけである。オーセンティシティをめぐるこうした関心は、ミュージアムの専門家や学者たちが再建に携わる以前から起きていた。住居はどこに造られるべきなのか。住居には何かいわくの物語がなくてはならないのか。再建の詳細はどんなものか。どんなものがどんな住居に置かれるべきか。こういった問題が浮上してきたのだ<sup>6</sup>。

19世紀後半から現在まで、専門家たちはそれぞれの理解、それぞれの関心から、こうした問題に対してそれぞれの答え方をしてきた。ニュー・セイラムが1919年にイリノイ州にあたえられる以前でさえ、再建されたニュー・セイラムは論争の多い場所であった。アブラハム・リンカーンに関して学問的な見解があるのに対して、そこにもともと住んでいた人びとの子孫たちが彼らのファミリーネームを擁護するべく提示するアブラハム・リンカーンに関するポピュラーな見解がある。パブリック・パークとしてニュー・セイラムをとらえようとする人びとに対して、歴史の名所としてとらえようとする人びともいる。リンカーンのことを伝えるメッセージに対してクラフトを主眼におきたいという人びともいる。また歴史的な関心とビジネスの関心も対立していたりする。こういった争点が重なりあって、それらが、まるでサンダーストームの暗雲がイリノイの大草原に立ち込めるかのようにニュー・セイラムを覆っているのだ（Bruner 1993b）。

ニュー・セイラムの意味をめぐって様々な関心や係争が生じているため、オーセンティシティの第4の意味—誰がオーセンティックかどうかを決定するオーソリティを有するのか—はつねに基調に流れている

ものとなっている。少なくとも、ミュージアムの専門家たち、内部の人びと、その地域の人びと、学者たちの間ではそうなのだ。オープンな議論を展開するこの時代、いっそうその傾向は強まっている。しかしながらツーリストにとって、解釈をめぐる特定の議論がパブリックな争点とならない限り、第4の意味でのオーセンティシティを意識することはないだろう。ミュージアムのスタッフたちは専門家や地方の歴史家たちのオーソリティを頼りにしているが、学者はたまにそうした意見に賛同しないことがある。イリノイ州がその場所を所有しており、基金を提供していることから、その場所は支配階級やエリートたちの利害を反映していると考えている者もいる（たとえば、Wallace 1981）。しかしニュー・セイラムの管理者の報告によると、州の役人が介入してくることはめったにないし、あってもそれは、ある 이슈が公的に政治化したときに限っているようである。したがって問題は、エスタブリッシュメントのものか民衆のものかということではない。そうではなく、多様な交わることのない声の問題なのである。それは、学者や民衆、地域の人びとやエスタブリッシュメントの間で生じているものであり、一見、同質的な層の間でも見られるものなのだ。まさに多くの異なる見解がある。とすれば問題は、歴史に関してどの見方を正しいかオーセンティックだと受け容れるのか、それを決定するオーソリティを誰が有するのかということであろう（Bruner 1993a）。歴史を誰が構築するかという問題は、マルチ・カルチャリズムのこの時代にあって重要なものとなってくる。

以上を要約すると、われわれは、本物らしさ（verisimilitude）、真実さ（genuineness）、オリジナリティ（originality）、オーソリティ（authority）を基礎として、オーセンティシティの4つの意味<sup>7</sup>を確認してきた。ニュー・セイラムにいるミュージアムの専門家たちは、第1の意味でオーセンティシティを受け容れており、1830年代に似せ、訪問客に対して信頼できるものを提示しようとする。彼らはたまに第2の意味も用いて、正確なシミュレーションについても言及したりする。だがニュー・セイラムは周知のごとく複製であるため、第3の意味を彼ら専門家たちは見ないですまそうとする。ただ第4の意味、つまりオーソリティの問題を避けてとおれはしない。オーセンティシティという言葉をめぐる問題は、文献においてであれフィールドワークにおいてであれ、どの意味がこの場合に顕著となっているのかというコンテクストを分析せずに理解できないはしない。オーセンティックかそうでないかという二分法を受け容れるのではなく、ここでの目的はまさに、オーセンティシティの意味を社会的実践のなかで理解することなのである。

ニュー・セイラムのスタッフは意識的にしばしばオーセンティシティという言葉を用いる。彼らは、正確なものでなくてもよいから、それに少しでも近い、信じるにたる（believable）シミュレーションを創ろうと努めている。それがあ部分では、彼らの名声にむすびつき、アイデンティティとなっているからである。彼らは1830年代の専門家として人から見られ、そのように自覚している。次に、われわれは以下のような問題を考察することになろう。ミュージアムの専門家たちは、第1の意味でも第2の意味でもニュー・セイラムのオーセンティシティを実現しているのか。ニュー・セイラムは1830年代のオリジナルと比べ、信じるにたる（credible）シミュレーションあるいは真実のもの（true）となっているのか。ミュージアムの専門家たちはどれほど、彼らの目的を達成しているのか。私は微細な事例をとりあげ、そこからより深いレベルにまで掘り下げていこうと思う。まさに表層から深層へと、当然だと考えられ調べられもしなかったものの中へと進んでいこう<sup>8</sup>。

## その場所

ある日、ニュー・セイラムの管理人はガソリンがショップの前で公然と置かれているのを目にした。そこでガソリンを訪問客から隠すようにと言ったそうだ。彼が言うには、ガソリンが必要なら置いてもいい



が、見えないところに置かなくてはならないらしい。またべつの話のだが、新しい道をつくった後で雨の日に泥の水溜まりができるようになってしまい、ツーリストたちはその泥を廻りこんで中へ入らなくてはならなくなったので、ニュー・セイラムの解説者の一人がその家の外にフラワー・ベッドを置いたそうだ。管理人のアシスタントがそれを見つけて、そのフラワーベッドが退屈で、とにかく「オーセンティック」に見えないと言ったそうだ。1830年代にそんなものなどありはしないのだから。アシスタントは即座に花を目立たない木屑に代えたそうである。木屑に代えるのもおかしな感じだが、とにかく、これら2つの場合、不適切だと考えられたアイテム、すなわちガソリン缶と花は別のものに取り替えられるか、取り除かれるかしたのである。「信じるにたる (believable)」という第1の意味であれ、「真実のものである (genuine)」という第2の意味であれ、オーセンティシティは当たり前なことでは決してない。そこでは何か後ろにやられ、その場所は常にモニタリングされ編集されなくてはならないのである。

ニュー・セイラムでは、オーセンティシティに対して多くの意識的な妥協が行われる。その場所を創っていくうえで必要なものもあるが、他のもの（ほとんどのもの）は訪問客が楽しめるようにされている。こういった妥協は、それによって、少なくともツーリストたちにとっては再建されたニュー・セイラムがオリジナル以上に良いものとなるのだから、歴史的な再構築においても罪のない嘘であると言える。

いくつかの例をあげてみよう。排水路は雨水を流すためにログキャビンに造られている。昔は動物は自由にうろついていたが、今はフェンスの中にいる。そうすることで動物の排泄物があちこちに落ちていたりすることもなし、訪問客も守られるというわけだ。そういったフェンスは、まるでもともとあったかのように、ツーリストの流れをつくりだしてもいる。コンビニなど1830年代にはなかったが、目立たないかたちで休憩所があり飲み物が買えるようになっている。小道には、訪問客が座り休めるように、ベンチが据えつけられている。その道も舗装され、ツーリストたちがぬかるみを歩かなくてもよいようになっている。1830年代に校舎は村から1.5マイルも先にあったのが、訪問客に便利のように村の中に造られている。粉引き機はかつては完全に家畜、それも牛の力で動かしていたが、今ではモーターが隠されている。ラトリッジ・タバーンやベリー＝リンカーン・ストアには、ツーリストたちに見えないように電気ヒーターがある。丸太の隙間にはセメントが詰められているが、1830年代当時、セメントは発明されていない。セキュリティ付きの門もあって、セキュリティ・システムやアラームが備えられている。これによってイタズラをされないようにしているわけだが、それもやはりツーリストたちには見えないようにされている。ある時ニュー・セイラムでも、レコード・テープによるガイド装置を提供したことがあるが、やはり中止となった。とは言え、今でも小さなワイヤーがいくつかの家からでている。家は古いため、定期的に修理がいる。ある時には50%以上の家が修理されたのだが、州法で車椅子の人のためにスロープを備えつけることが決まっているため、敷石のスロープをつけることになった。しかし、それも草や土で目立たなくされている。ニュー・セイラムで芝生が刈られているので、1830年代芝生は刈られていたのか管理人に尋ねたことがある。彼が言うには、多分、芝生は刈られてはいなかっただろうということだ。ただ彼は、このイリノイでもし芝生を刈らなかつたら、良い市民とは見なされないとつけ加えて言ったのだ。こういった意識的な妥協が行われているわけだが、もう少し微妙なファクターが働いていることを次に見てみよう。

1990年代のニュー・セイラムの家は、オリジナルな1830年代の家を表現している。それゆえ、オリジナルな家であれば160年経っているのだから古く見えるようにと、それらは風雨にさらされてきたのである。だが1830年代の家は実は、もっと新しく見えたのだ。ニュー・セイラムの村は1829年に建設され、1839年にうちすてられたので、たった10年間しか人が住んでいなかった。つまり家が古く見えるほど十分に住まれなかったわけである。だから1990年代の家は、オリジナル以上に古く見えるのである。この例を見ると、オーセンティシティの第1の意味と第2の意味の間で、ある緊張関係が存することが分かる。家が古く風雨

にさらされるほど、1990年代の家は訪問客にとって1830年代の家以上に、信頼するにたる (believable) ものとなる。それらはオリジナル以上に立派に見え、1830年代にはあったような掘っ立て小屋もありはしないのである。こうして1990年代のニュー・セイラムは、歴史的に見ていっそう田舎風を感じをもち、こんな感じで家や場所の再建が行われる。その場所は1990年代の観光客たちにとっては信じるにたる (believable) ものであるが、1830年代のオリジナルからすれば本当の (genuine) ものではないのだ。

1830年代、人が住んでいた10年間で、周りの木々もまた、建物を造る木材や薪にするため刈りとられていた。しかし再建されたニュー・セイラムでは、木々も葉っぱも伸び放題となっている。いま1990年代では、こうした密集した木々のせいで、ニュー・セイラムは1830年代以上に田舎風かつ田園風になっている。

解説者は当時の服を着ているが、特に問題なのがメガネである。ボランティアやスタッフは必要に応じて自分たちのメガネをかけているのだが、その何人かは「昔風」だということで、小さな丸い「金縁」メガネを買ったそうである。一般的に言ってコスチュームには、ジレンマがあると言えるだろう。というのは、ニュー・セイラムのよりの住民たちの服装について誰も知ってはいないからである。服装については何も記録がないのだ。

ペオリア・ジャーナルからの1936年6月19日付の新聞記事によると、「村にいる4人のガイドたちは、ジーンズとジーンズのズボン、綿毛のシャツ、皮のブーツを着て、当時の住民たちの役を演じていた」。だがジーンズ、ウールのシャツ、ブーツは1930年代の人びとにとっては1830年代風の服装として受け容れられるものであるが、1990年代ではそうではなくなっている。大抵の学生や訪問客自身が今や、そういった服装をしているからだ。観光客たちともよりの住民たちとの間では、服装の違いがなくてはならないわけである。だからこそ1930年代には適切な1830年代の服装であったものが、1990年代にはそうではなくなっているのだ。本論で展開してきた概念を用いて言えば、歴史的に信頼できる (believable) という意味でオーセンティックと考えられていたものが、60年間で変わったということだ。スタンダードとされているものが移り変わり、オーセンティックと思われていたものも異なるものとなる。ミュージアムの専門家たちの言うところでは、パブリックにはどういったものが信じるものとされているのかを意識する必要があるそうだ。だが、これは複雑な問題を含んでいる。パブリックと言っても色々な側面があり、また専門家たちとパブリックも独立しているわけではなく、対話的な相互作用において形成し合っているから。

1988年に筆者がニュー・セイラムで調査を始めたとき、解説者のコスチュームの問題はほとんど議論されていなかった。当時、スタッフの何人かだけが、解説者の服装がどれもこれも同じで、まるで『大草原の小さな家』から抜け出てきたようなコスチュームで、作業着ばかり着ており、みな農家の人に見えると思われていた程度である。コスチュームの正確さが問題になるにつれて、オーセンティシティに関してもスタッフ内部で対話が始まったのである。Lionel Trilling (1972) によると、オーセンティシティは疑いが生じてはじめて問題となるのだ。

服装に関するこういった論議を聞くと、社会的ドラマに関するVictor Turnerの概念を少しばかり思い出す。そういった論議は、ニュー・セイラムの文化がいかにかに常に再創造され続けているのかといった構築主義のプロセスを描き出しているからである。はじめ服装のスタイルは単に受け容れられていたにすぎず、調べられも議論されもしなかった。服に関し批評が始まったことにより、これまで受け容れられていただけの慣習は打ち破られ、それに関する論議が広まったのである。こうして新たな服装のスタイルが発明され、専門家も相談を受けるようになった。新たな服のパターンが考案され、少なくとも一時的に問題は解決された。ここでの論議のポイントは、1830年代のニュー・セイラムに何が本当に (genuinely) 存在していたのかということではなく、何が信用できるもの (credibility) なのか、1830年代のドレスとして何

が現在受け容れられるのかということなのである。たぶん、こういった問題は将来再び生じるだろうし、それに対して何回も同じプロセスが繰り返し反復されるだろう。

服装に関して議論が行われていたときに、コスチュームが階級の違いを反映すると指摘した人もいた。それによると、サム・ヒルの家の住民は富裕であり、成功した商人であったのに対し、バーナーの家の住民は貧困であったので、彼らは違うコスチュームを身につけていたに違いないとのことだ。階級の違いに関する現在のこうした見解が、過去へと投影される。こうして例えば、ヒルの家の解説者は富裕階級の服装を身にまとい、貧困なバーナー家の解説者は労働者階級の服装を身にまとうことになるのである。ただし、ミセス・ヒンスリーは例外である<sup>9</sup>。彼女は、1830年代に貧困であったガリハー・ハウスにおいてボランティアで解説者をしているのだが、洋服に関心を持っており、自分のデザインした服を持っている。彼女はそれを着たいと考えており、実際、不適切な「富裕な」服装を身にまとっている。ミセス・ヒンスリーは、そういった服装の議論に抵抗した一人であり、誰も彼女を変えることはできなかったのである。彼女は服装で自己を表現しようとしていたのだ。

こういう意味で、オーセンティシティとは闘いであると言えよう。プロフェッショナルなスタッフからすれば、彼らはニュー・セイラムを信じるにたりて (believable)、本当の (genuine) ものにするという目標を持っているのであって、そのためにオーセンティックでありえないものを常に意識化していなくてはならないそうだ。しかしオーセンティックでないものがニュー・セイラムを織りあげ、細部にまでしみわたり、その場所を創るという社会的実践と関わるようになるにつれて、よりもっと根本的な問題が生じてきた。

それぞれのログハウスには、最も主要な住人の名前がつけられており、訪問客がくれば、解説者たちはその家に住んでいた特定の家族についてストーリーを語る。たとえば、ラトリッジ・タバーン、オンストットの家、ヒルの家といった具合である。しかしながら1830年代において、それぞれの家にはいくつかの家族が住んでいたのであり、オンストットの家にも複数の家族が他のところと同様に暮らしていたのだ。第一ベリー＝リンカーン・ストア<sup>10</sup>も、店であったのはほんの数ヶ月のことなのに、この名前がつけられているのは、アブラハム・リンカーンが重要人物であり、そこは彼が店主をやっていたことでよく知られているからなのである。こうして、歴史はかためられ単純化されていくわけである。

それぞれの住居で、ただ1つの家族のことだけが焦点を当てられているのだが、特定の家族について語られているストーリーは、いつその家族がやって来て、ニュー・セイラムで何をして、いつ出ていったのかに関するものばかりだ。こういった物語は必ずしも正確なものではないが、1830年代の住民が自分たちのことについて語っているようには思えない感じである。少なくともおしまいの部分はそうで、全部、家族が出て行って、それでジ・エンドとなっている。それぞれの物語は、家族がやって来て、また出て行って終わるというサイクルで描かれている。明らかに、そうしたストーリーは村がうちすてられた1839年以降に語られ始めた。こうした回顧的な見方によって、ニュー・セイラムの大きな物語 (マスター・ナラティブ) が確立されていると言える。ニュー・セイラムの大きな物語 (マスター・ナラティブ) とは、アブラハム・リンカーンの変身の物語であり、ニュー・セイラムで努力したことが実を結んで、一人の平凡な労働者が教養ある法律家・政治家となって、いつしか南北戦争で国を指導し連邦を救うというものである。ニュー・セイラムは英雄アブラハム・リンカーン変身の地として知られているのだとすれば、個々の家族に関するそれぞれのストーリーはそうしたより大きな構造の複製となっているのである。

それぞれの家について1家族だけに焦点が当てられるばかりではない。それぞれの家には1人の解説者が州予算でやとわれている。訪問客は神妙な面持ちで家から家へと歩き回り、それぞれの家では解説者が様々な側面から1830年代の生活について教えてくれる。解説者は誰も一緒に話しをすることはなく、も

ちろん一緒に歩くこともない。だから、かつてあったような風景、つまり周りの農家の人が穀物を売りにきたり、道具を修理したり、医者にかかったり、品物を買ったり、郵便局で郵便物をもらいうけたりといったことは見られないのである。こうしてニュー・セイラムは自律して孤立した家から成った村となっており、集いやコミュニティは存在しないのである。結果として、その場所に関する1990年代の表象が、1830年代の生活を歪めて伝えているのだ。ニュー・セイラムにはクラフト・ショーやキルト・ショーといったイベントが行われるが、訪問客はそれぞれのブースを次々と神妙にまわる。こうして1830年代の生活は集いの欠けたものとなり、まるで1990年代アメリカの田舎の生活みたいになる。近隣の人々は孤立して暮らしており、社会的に相互に無関心なのだ。

Taylor and Johnson (1993) によれば、ニュー・セイラムには開拓者魂を伝える解説者は一人もいないらしい。大酒を飲み、大騒ぎでふざけまわり、闘鶏にうつつをぬかす、ニュー・セイラムでは1830年代の開拓者として、そんな人間がいたのである。乱暴者は歴史の闇に葬り去られたわけだ。これと同様のことは、コロニアル・ウィリアムズバーグでも見られる。そこではつい最近まで中産階級のため、ウィリアムズバーグの半数を占めているはずの黒人がいないことにされていたのである (Gable et al. 1992)。だがニュー・セイラムではまだなおも、開拓者の乱暴者のことを伝えようとする動きは見られない。

ニュー・セイラムはアウトドアのミュージアムであるが、他のすべてのミュージアムと同様に、訪問客は主に視覚的なものによって何かを感じとろうとする。ツーリストたちは確かに解説者から1830年代のことを聞いたりもする。それは主に口伝であり、会話さえ行われるときだってある。しかしツーリストたちが村を歩き回るにつれて、その知覚のモードは主に視覚的なものとなる。基本的に、彼らは見るのだ。彼らは大抵、解説者が相互に話しをしているところを聞いたりはしない。しかしながら、1830年代は視覚文化ではなく口承文化であったはずで、情報の交換も会話やゴシップによって行われていたのである。こうした次元が1990年代のニュー・セイラムでは主要なものではなくなってきたので、村が経験される仕方、2つの時代にあって村が知覚されるモードは根本的に異なっているのだ。

明らかに、限られた知識や資源でもって、あらゆる側面において歴史的複製を正確なものとするのは不可能である。求めてもかなうとすれば、それは、ツーリストたちが受け容れてくれる表象を創ることなのだ。たとえこの大草原に建てられた1990年代のログハウスが、オリジナルな1830年代のものについて正確なレプリカを提供してくれるとしても、以下のような問題が生じるだろう。すなわち、いかにして人は経験の知覚のモードや、その場所の意味をオーセンティックとするかという問題である。

1830年代と1990年代では非常に重要な違いがあるのだ。その違いの一つとしては、あまりにも明白すぎで言うまでもないことだが、1990年代のニュー・セイラムではほとんどの人がツーリストであるのに対し、1830年代の人に訪問客や旅人、貿易商はいたかもしれないが、ツーリストはいなかったということである。また1990年代のニュー・セイラムは、1830年代にあったはずの争い、緊張関係、いやらしい部分が抜け落ちており、理想化されたコミュニティとなっている。1990年代のニュー・セイラムは、牧歌的で平和で調和のとれた村として表現されている。

また1830年代のニュー・セイラムでは、クラフトは能率をあげ生き残っていくための最もモダンに進んだ技術であったが、1990年代ではその同じクラフトが、モノをまだ手作業で作り各地方ごとに売っていた時代のノスタルジアを表現しているのだ。クラフトの意味は2つの時代では、完全に異なっている。さらにまた、1830年代ニュー・セイラムは商業の中心地であり、リンカーンがここに移り住んできたとき、彼は多分都会の中心地に来たと思ったはずなのである。しかし1990年代ニュー・セイラムは、ほとんどの人にとって、田舎で孤立して自足した田園風の場所であり (たとえばWhisnant 1983)、20世紀のアメリカにおけるいわゆる商業主義、物質主義、断片化といったものと正反対のものなのである。

1990年代のニュー・セイラムはアブラハム・リンカーンを描いている。実際、そこはリンカーンのニュー・セイラムと言われている。州の観光課の職員が筆者に語ってくれたように、「イリノイが売っているのはリンカーンだ」。だがアブラハム・リンカーンは、1830年代の村において主要な人物ではなかった。リンカーンは1837年にニュー・セイラムを去った後、郡の中心地も別の場所に移ってしまったので、1839年にその村はなくなった。それ以来、1839年から1860年まで、ニュー・セイラムは歴史で注目されることはなかったのである。その後1860年、リンカーンが共和党の大統領候補になったときに、その伝記が大々的にキャンペーンされ、エリートではない、大草原で生まれた平凡な人、東部のエスタブリッシュメントとは全然違うどちらかと言えば卑しい出自の人間、しかし誠実なるエイブとしてアブラハム・リンカーンの政治的イメージが構築されたのである。実際は、1860年においてリンカーンは、スプリングフィールドで成功した法律家となっており、富も権力もある人間であったし、社会的に著名な家族と姻戚関係を結んでもいた。リンカーンが1865年に暗殺されて以後、彼は殉教者となり、キリストのごとく国に自らの命を捧げ連邦のため犠牲となった人とされた。こうしてリンカーンという偉大なるアメリカにおける民衆の英雄の神話が創られていき、小説や歌や詩、劇や伝記やテキストのなかで描かれ、アメリカの子どもたちなら皆知るところとなったのである。

1897年、地方の人びとがシャートクァー（教育振興団体）にニュー・セイラムを再建させたのは、リンカーンがこの村を離れて60年後のことである。復元に対してこのような関心が生まれたのは、リンカーンのことを知っている元々の住民たちがいなくなって以降だ。多分、その場所を復元しようとする動きがおこったのは、その地にはじめて移り住んだ人びとが死に絶えていくとともに、失われていくかつての暮らしの記憶を残したいという想いからである。リンカーンがニュー・セイラムで暮らしていたずっと後になって、アブラハム・リンカーンについて口承で伝えられていたことが、数多くの書物に記録されていた（Herndon and Weik 1889; Onstot 1902; Reep 1927）。オールド・セイラム・リンカーン・リーグという団体が1918年に昔の人を呼び集め、彼らにストーリーを語ってもらったことがあるが、それはニュー・セイラムがうちすてられてから79年後のことである。現在のニュー・セイラムは1930年代に再建されたものであるが、そのとき、かつて村に人が住んでいた頃から1世紀が経過していた。1830年代のニュー・セイラムをいま復元しているのは、歴史的かつ神話的なリンカーンを再構築するためであるが、こうした歴史や神話は1830年代には存在しなかった。これは重要である。それは1865年以降に創られたことがらなのであり、それゆえ、この歴史の名所には多くのパラドックスや曖昧さ、アイロニーが生じるのだ。

## 2つのストア

本論における文化人類学的な分析においては、オーセンティックかオーセンティックでないかといった対立を乗り越えようとしている。1830年代と1990年代を考察する場合、どちらか一方を他方より優先させたり、より良いものとか、基本的なもの、オーセンティックなものだと考えたりする必要はどこにもないし、訪問客もそういった質的な比較を普通行なったりもしない。1830年代のニュー・セイラムがあるのなら、1990年代のニュー・セイラムがあってもよいだろう。1830年代の村は歴史的に以前に存在していたものだが、1990年代のニュー・セイラムは後でできて、1990年代の感覚にマッチしたものとなっている。訪問客は自分自身の意味づけをその場所に行なうのである。そのことを2つのニュー・セイラムのストアを考察することによって明確にしていこう。

第一ベリー＝リンカーン・ストアでは、1830年代リンカーンが店主をしていたが、そこは訪問客にみやげ物売るストアとして再建された。その点で、何も売られることのない第二ベリー＝リンカーン・ストアやヒル＝マックニールの店、オフアッツの店といったニュー・セイラムの他のストアと違っているのだ。

第一ベリー＝リンカーン・ストアは、ボランティアの店員が当時の服装をきて対応してくれるが、ニュー・セイラム・リンカーン・リーグという団体がそこを運営している。それはかなり成功していて、売り上げはその場所の活動をサポートするために使われている。最初ストアが始められたとき、ニュー・セイラム・リンカーン・リーグはオーセンティシティのための委員会を結成し、個々の商品をチェックしていたが、こうした努力はあまり実を結ぶことはなかった。結局、プロのマネージャがストアに雇われ、その人が収益額に目を光らせることになったのである。新しいマネージャは売っている品物を厳選し、オーセンティシティの委員会がそれに関与することはなくなった。

ベリー＝リンカーン・ストアで売っている品物を調べてみることは、分析に役立つであろう。そこはクラフトのショップとなっていて、陶器、バスケット、キルト、敷物、ぬいぐるみ、ほうき、大きめの木のスプーン、銅製のポット、樽、おけ、昔のアメリカの着物のパターンブック、アライグマの皮でできたキャップ、ロウソクといったたくさんのハンドメイドの品が置かれている。ツーリストの多くは、ニュー・セイラムのクラフト・ショップで造られたものを求めて来ているが、すべての品物は割合とよく売れているようだ。実際、ショップはよくツーリストで混雑している。そういった品物が1830年代のストアで売られていた品物を表しているのかとボランティアに聞いたことがある。彼らは、自分たちの売っている品物が、1830年代に造られていた当時のオーセンティックなものであってもらいたいと言っていたが、これは、オーセンティシティのうちでも信じるにたる (credibility) という意味にあたるであろう。ツーリストたちがオーセンティックなものを求めているかどうかも聞いたのだが、彼らボランティアの答えは、問題はほとんど生じないということであった。

舞台となっているのはログキャビンで、店員は1830年代の服装をしており、売られているものも「昔風」で「田舎風」であり、インタビューによるとツーリストたちはそういったものを受け容れているようである。本物らしさ (verisimilitude) を基盤として信じるにたる (credible) 複製を創りあげるという目標をミュージアムの専門家たちが達成できているという程度には一すなわちその場所が訪問客にとって信じるにたる (believable) ものとなっている程度には一ツーリストたちは、その場所で見つけたものに満足している。しかしミュージアムの専門家たちによって用いられている、本論で展開してきたようなオーセンティシティを区別するしかたが、ツーリストたちの区別のしかたと同じであると考えるのは誤りであろう。ミュージアムの専門家たちは生産者であり、ツーリストたちは消費者である。両者のアプローチのしかたは違って当然である。もちろんツーリストたちは、自分たちの買っている品物が1830年代のものではなく、その複製でさえないものも多いと気づいている。さらに1830年代のどこの店でも、現在の第一ベリー＝リンカーン・ストアで売っているような品物を置いていないということも知っている。ツーリストたちが買っているのは、みやげ物であり、ニュー・セイラムの旅の記念品、家へ帰ったときの贈り物なのだ。それは必ずしもオーセンティックである必要もなく、また「オーセンティックな複製」でさえなくてもいいのである。

1830年代のニュー・セイラムで何が売られているのか、記録はどこにも残っていないので、そのことについては何も知りえない。しかし当時、この大草原の他の店で何が売られていたのかについては分かっている。たとえば、ニス、ワニス、ペイント材、染料、メガネ、香料、ナイフ、斧、小道具、ペンとインク、金物、糸、ボタン、針、宝石、酒、陶磁器、本、織物、帽子、窓ガラス、フライパン、釘、火薬、鍵と蝶番、コーヒー、紅茶、砂糖、小麦粉、米、チーズ、糖蜜等々である (Atherton 1939; Kwedar et al. 1980)。そこには、東部のファッショナブルな製品や、工業製品、ヨーロッパ製の品々があったのだ。1990年代のツーリストたちは、こういった品物に興味を持ってはいないし、持っていたとしても、ニュー・セイラムのクラフト・ショップで買う必要はないだろう。

1830年代のストアと1990年代のストア、この2つのストアの品物を見ると、明らかに、それぞれの時代の第一ベリー＝リンカーン・ストアの品揃えは、それぞれの顧客の要望に沿ったものであることが分かる。昔のストアは、1830年代の大草原のパイオニアたちが生きていく上で必要な品物を置いていた。それに対して、ハンドメイドのクラフトを置いている現在のストアは、1990年代のツーリストたちにとってみやげ物となるものを売っている。それぞれのストアは、それぞれの時代において意味がある。それは、どちらかが他方より優先されるというものではない。そういった評価は、むしろポストモダンの理論家たちや社会理論家たちがくだしているのだ。次章では、そのことについて見ていくことにしよう。

## 考察

オーセンティシティや複製に関する筆者の主張は、BaudrillardやEcoといったポストモダンの理論家による主張とは異なっている。また、MacCannellやHandlerといった理論家がツーリズムやオーセンティシティや歴史の名所について述べた著作の立場とも異なっている<sup>10</sup>。私の主張はポストモダニストの見解から形成されたものであり、次にMacCannellやHandlerに目を向けていったものであるが、その後、構築主義的な立場を展開するにいたっている。

BaudrillardやEcoによれば、シミュラクルは真実のものとなり、コピーはオリジナルに、いやオリジナル以上のものになっているとされる。ポストモダンのハイパーリアリティにあって、われわれはただシミュラクルにのみ接している。起源は失われ、回復されず、存在もしていない。もはやオリジナルな現実などどこにもないのである。Baudrillard (1938 : 48) の主張では、「シミュラクルの下には真実が隠されていて、それを見つけないというのは間違っている」。これが、エレクトロニクス時代に特有なポストモダンの状況であると彼は言う。だが私からすれば、これは人間にとって普通の状況であって、**あらゆる文化はつねに創造され、また再創造され続けるものなのだ**。ニュー・セイラムにあって1830年代にも、以前のイメージがあり、イリノイの他の村が1820年にどのように建てられていたのかに関して文化的な知識があった。その際、1830年代の村は1820年代の村のコピーだと言うこともできる。1820年代の村が1830年代に複製され、ニュー・セイラムの地域性をもつ特定の状況になじむようにされたわけである。ニュー・セイラムの住民によって創造的に修正がほどこされていったのだ。そう考えれば、**あらゆる社会はすべて途上であり、あらゆる文化はつねに進行形なのだ**と言えよう (Turner and Bruner 1986)。

この理論的パースペクティブを筆者はこの数十年来採ってきたが (たとえばBruner 1973, 1984, 1993a)、ときにこれは構築主義的立場として知られているものである。近年では、「文化の創造」を強調する理論的立場とされているが、この立場から重要な研究が産みだされてきた (たとえばBabcock 1990; Borofsky 1987; Handler and Linnekin 1984; Hanson 1989; Hobsbawn and Ranger 1983; Hymes 1975; Wagner 1975)。このパースペクティブのルーツは非常に古く、Wihelm Dilthey、John Dewey、George Herbert Mead、アメリカのプラグマティストにまでさかのぼることができ、またロシアの偉大な文芸批評家Mikhail Bakhtinにまで、さらにはRoland Barthesやポスト構造主義、パフォーマンス・セオリーにまでさかのぼることができる (Bauman 1992)。

**文化は生成し、息づき進行中であるとする構築主義的な見解**は今日では広く受け容れられている (Lavie et al. 1993)。本稿はこのパースペクティブの歴史を提示したり、その様々なバリエーションを論議するものではないが、この立場が共通して持っているのは、以下のような見解である。すなわち**テキストの意味はテキストに内在するのではなく、人びとがそのテキストをいかに読むか、いかに経験するかにかかっている**ということだ。社会化はせいぜい文化を伝える不完全なメカニズムにすぎないのであって、文化的伝統の新たなパフォーマンスや表現は、以前のパフォーマンスに対しては、つねにそのコピーなのである。

と同時に、それはまた、新たな環境や状況に対してはオリジナルなのだ。Handler and Linnekin (1984 : 288) が主張するように、「あらゆる真正な (genuine) 伝統は偽りであり、.....あらゆる偽りの伝統は真正 (genuine) である」。あるいはGeertz (1986 : 380) の言葉を借りれば、「それはオリジナルなコピーなのだ」。生成のプロセスにある1990年代のニュー・セイラムは、オリジナルやそれ以上のものを構築しようとしている。そのため本稿で筆者が主張してきたように、オリジナル/コピーという区別をなくすことが可能となる。

いま1830年代のニュー・セイラムと1990年代のニュー・セイラムは、生産と再生産の終わりなきプロセスにあって、つねに構築され続けている。1830年代についてわれわれが手にしているのは、多少の当時の物品、考古学的遺跡、古い記録、ストーリー、古い村の精神的モデル、すなわち民衆や歴史家の想像力のなかで生き生きと存在しているモデルくらいであろう。だが、それも変化し続けている。われわれは1830年代のニュー・セイラムをつねに再構築し続けており、その時代にフィットするよう歴史を、そしてアブラハム・リンカーンを書き換えているのだ (たとえばBasler 1935)。20世紀のニュー・セイラムは何回も変わり、少なくとも2度大幅に建てかえられている。1918年に村を復元しようとする努力は1932年につゆと消え、第2回目の復元が1930年代に行なわれた。定期的にログハウスはインテリアも含め、修理が行なわれている。1990年代には新しいビジター・アンド・オリエンテーション・センターがオープンし、ストアの場所は移動となり、公園の入り口付近にレストランが建てられた。

1990年代と1830年代のニュー・セイラムは、つねに創られ続けているのである。しかし、そればかりではない。1830年代に対するわれわれの概念に1990年代のニュー・セイラムが影響をあたえてもいる。言い換えれば、コピーとされていたものがオリジナルに対するわれわれの見解を変容させているのだ。これは、Taussig (1993) の著作『Mimesis and Alterity』に貫かれている問題である。アカデミックな歴史家なら賛成してくれるだろうが、1990年代のニュー・セイラムはアブラハム・リンカーンのニュー・セイラムを強調しすぎており、彼がそれ以前に過ごしたインディアナ時代やバンダリア時代を無視する傾向がある。リンカーンがニュー・セイラムにやって来たのは22才のときで、その時彼はすでに大人であり、真の精神的成長はどこか別の場所でなされたはずなのだ。歴史家Mark E. Neeley (1982 : 222) が示唆するように、観光名所としてのニュー・セイラムが創られることによって、リンカーンの伝記のなかでニュー・セイラム時代の重要性が誇張されるようになったのではないだろうか。こうして20世紀における観光の表象がプロフェッショナルな歴史家の言説をつくりかえ、1830年代に対するわれわれの理解のしかたにも影響を与えることになったのである。

オーセンティシティ、ハイパーリアリティ、シミュラクルに関する研究において、BaudrillardやEco、MacCannellやHandlerたちはみな、西欧やアメリカの文化に対し批判的である。MacCannell (1976) によると、観光客たちは自分自身の文化に不満を抱いており、どこか別の場所でオーセンティックな経験を求めているとされる。MacCannellの研究は1960年代にそのルーツを持っており、西欧文明や自己を追求する疎外された人間に対して、古い19世紀的な批判を繰り返しているにすぎない。

Handler and Saxton (1988) もまた同じ立場だ。彼らによると、「生きた歴史の実践家にとって、すなわち、われわれの多くにとって、日常の経験は『リアルでない』、『オーセンティックでない』、したがって疎外されたものとなっている。歴史的な世界を通じて、実践家はオーセンティックな世界を再び獲得しようとする」(1988 : 243)。MacCannellにとって観光客がオーセンティシティを追い求めているのは別の場所だが、Handler and Saxtonにとっては別の時代ということだ。Handler (1986) にとってオーセンティシティは「真の自己」に深く関わるもので、彼やSaxton (1988 : 243) にとり「オーセンティックな経験は.....『リアル』な世界や『リアル』な自己に触れていると感じるものなのである」。そこでは、



日常の世界がリアルかつオーセンティックでないものとして前提されている。MacCannell、Handler and Saxtonの主張によれば、オーセンティシティの探求によって、汚れない誰も踏みあらしでないオーセンティシティは破壊されてしまうがゆえに、その探求は失敗に終わるのだ。これらの研究者たちは、オリジナルなピュアな状態、第3の意味でのオーセンティシティ、現地に入る前のエスノグラフィックな状態を想定しているのである。まるで歴史は観光によって始まり、観光が世界を汚してしまうかのようだ<sup>11</sup>。

MacCannellやHandlerたちは、ツーリストがオーセンティシティを求めていると言うが、しかしオーセンティシティを求めているのは彼ら現代の知識人たちの方であり、彼らはツーリストに自画像を投影しているにすぎない。この場所がオーセンティックな複製だと言うミュージアムの専門家たちは、第1か第2の意味でオーセンティシティという言葉を用いているが、第3の意味では用いない。つまり問題は、誰がオーセンティシティを追求しているのかということである。今一度、Trilling (1972) 的な言い方をすれば、オーセンティシティは、それに対する疑いが起きたときに生まれる。適当な知識もなく1830年代のニュー・セイラムを再建しなくてはならなかった20世紀初頭イリノイにいた人びとは、オーセンティシティに対する関心を深めていった。今でも、人類学者、ミュージアムの学芸員、歴史家、熱心な収集家、美術商たちは、ツーリストたちと同様に、オーセンティシティを探求しているのだ。Appadurai (1986 : 44-45) は、今日オーセンティシティが鑑定や趣味、目利きの政治学に関わる問題になっていると述べるが、ここではもっと進めて、誰がオーセンティックかどうかを決める権利を有するのかに関する政治学だと主張したい。

オーソリティの概念は、オーセンティシティという言葉を用いることに相関している。誰がオーセンティックかどうかを決めるのかという問題を提起する場合、議論の性質は変わり、もはやオーセンティシティは対象に内在するのでも、永久にある時代に固定されているのでもなくなる。それは闘いとなる、すなわち社会的プロセスとなる。それは多くの利害関心が、自己の歴史解釈を主張し合う場となる。文化は競われ、生成し、構築されるものとなるのである。行為や欲望はそういった言説の一部なのだ。行為者がオーセンティシティという言葉を用いる場合、社会のどの部分が疑いを有しているのか、何がもはや当然とされていないのか、社会的な闘争がどのように展開されていくのか、いまの文化的イシューは何かといったことを、エスノグラファーは問いかけていかねばならない。これらはエスノグラフィックな問題、経験的な問題、つまりは調査を必要とする問題なのだ。この点において、グランド・セオリーはエスノグラフィーに道を譲ることになる。

オリジナルとコピー、オーセンティックなものとはオーセンティックでないものに関して、ポストモダンの理論家たちのように本質主義的にとらえることには、2つ問題がある。まず第一に、彼らはまったく逆のことを主張しているにもかかわらず、しばしばオリジナル、つまり第3の意味でのオーセンティシティを想定してしまっている。ポストモダンの理論家たちにとって、オリジナルはヨーロッパで、アメリカは二次的なものにすぎない。Baudrillard (1988) が言うには、「パリにいたときから」アメリカのすべてを知っていたということだ (1988 : 5)。アメリカは「旧世界の亀裂から生まれてきた」 (1988 : 7) のであり、「アメリカの真実はヨーロッパからまきに見ることができる」 (1988 : 28) と彼は言う。さらに彼は、アメリカが「なおも未開の社会である」 (1988 : 7) と述べている。ポストモダンの理論家たちにとり、オリジナルが文明化されたヨーロッパなのだとすれば、MacCannellやHandlerにとって、オリジナルとは疎外されていないピュアな状態、どこか他の場所にあり、観光名所や歴史の名所の裏側に隠されているもののことなのだ。

本質主義の問題として第二に、2つのうち一方が他方より良いものだとする価値判断が行なわれていると指摘しうる。BaudrillardやEcoというポストモダンの理論家たちにとっては大抵、オリジナルはコピー

より良いものとされているのだ。BaudrillardやEco、そしてMacCannellやHandler（これにくわえてBoorstin 1961）の議論を推し進めていくとすれば、ニュー・セイラムのような場所をなくした方が良いということになる。なぜなら、それはオーセンティックでなく、擬似的で、表層的、さらには合成的、かつシミュラクルにすぎず、ハイパーリアリティの、偽物だからである。コピーはオリジナルがあつてはじめて存在するとされる。しかしながら構築主義的なパースペクティブからすれば、それほど事態は単純ではない。あるものは時に現代において構築され、古くからあるものが歴史的な深みや正当性をつけくわえるために仮想のオリジナルとして「発見」される。あるものをコピーとしてしまうことは、オリジナルを仮定することになる。もしそうになると、オリジナルやコピーが創りだされる社会的コンテクストの違いやバリエーションを適切に説明できなくなってしまうだろう。オリジナルと複製、オーセンティックなものと同様にオーセンティックでないものという語彙にとらわれてしまうと、その両方が実は創られるのだということ適切に認識できなくなってしまうのである。

## 結論

ここで再び、ツーリストに関する議論に目を向けることにしよう。もしツーリストたちがポストモダンなハイパーリアリティやオーセンティシティを手に入れていないとすれば、彼らは何を手に入れているのか。BaudrillardやEcoの著作において、彼らはかなりの程度、アメリカに関する一般化を行っており、それが持つニュアンスを消し去ってしまっている。彼らがアメリカについて述べる時、彼らは同質な一枚岩の言語を用いており、歴史的な名所に来る多くの種類のツーリストたちの違いについて言及してはいない。彼らは、歴史的な名所の意味が構築されることについて気づいていないのである。

本稿が主張する見解によれば、ニュー・セイラムがツーリストたちにとって有する意味は、訪問客が村をまわり、解説者と相互作用をするといったような、その場所のパフォーマンスによって構築される。その場所を経験することで、訪問前には予想もしなかったような意味がもたらさるのだ。それゆえに、この場所はある意味、生成的であると言えよう。意味とはすべて、個々に独立したものでも辞書におさまりがえっているものでもなく、社会的なコンテクストのなかで生成するものなのである。したがってエスノグラフィックなパースペクティブを用いようとするならば、ニュー・セイラムが経験される社会状況を調べる必要があるだろう。

たとえばテーマパークを訪れる訪問客の多くは家族連れであり、一人ではない。つまり家族が、観光経験を持つにいたる基本の社会的単位となっている。そのため、しばしば子どもの教育に良いという点が強調されることもある（Willis 1993）。ニュー・セイラムでは、とくに学期中、たくさん子どもたちが教師たちと遠足にやってくる。ある時には40名の子どもたちがニュー・セイラムにいたが、その教育効果は明白であった。別の時には、移民がシカゴからやってくる、アメリカ市民となるトレーニングとして2時間をニュー・セイラムで過ごしていた。これらの場合、親や教師や移民局の役人たちがニュー・セイラムの意味について説明し、アメリカの歴史のなかでアブラハム・リンカーンが有する役割を強調していた。子どもたち、生徒、学習者はニュー・セイラムにやってくる、そういった知識を受けとったのである。

筆者はある時、7、8才のガールスカウトの集団とともにニュー・セイラムをまわったことがある。彼女たちは遠足でリーダーに連れられて来ており、親たちも数人ボランティアでサポートをしていた。一番の楽しみは、木を火にくべて、昼食にビーフシチューをつくることであった。シチューをつくるのに何時間もかかり、皆はお腹をすかすことになるが、話しはいきおい、かつてイリノイに暮らしていた開拓者たちの生活に向けられることになる。その生活は、どんなに大変だったのかを体験するのだ。これは、多くの訪問者のあいだで交わされるテーマでもある。

また、イリノイで暮らす農家の人がログハウスに入ってきて、解説者の一人がウールを紡いでいるのを見たときのことだ。その農家の人が言うには、子供時代、それとよく似た紡ぎぐるまが彼の家にあり、大草原の農家で、昔、祖母が紡ぎぐるまの前でお話しを聞かせてくれた思い出がよみがえるようだ。ニュー・セイラムにおけるその経験はまさに想起的なものであるが、多くのツーリストたちは、その場所で目にしたものを自分たちの個人的な生活と結びつけるのである。ニュー・セイラムの意味は、その場所に関する訪問客の経験の社会的コンテクストにおいて生じてくるのだ。

さらに、ある裁判官は、冬の早朝ニュー・セイラムにやって来るのが好きらしかった。かつてアブラハム・リンカーンが歩いたのと同じ神聖な場所を、たった一人で歩けるからだと言う。その裁判官は、リンカーンのように同じ地域で法を司っており、彼のオフィスにはリンカーンの胸像が置かれているということだった。彼は地方の芝居でリンカーンの役をしたこともあり、背も高くやせていて、外見上もリンカーンに似ていた。明らかに、彼はリンカーンへの同一化に個人的な意味づけをしていたのである。

ニュー・セイラムにやって来る人びとのなかには、大のリンカーン好きもいるし、アンティークを収集している人もいるし、アメリカのテーマパークを見てまわろうとする引退した人もいる。また「田舎」を訪れようとシカゴからやって来た洗練された都会人もいるし、外国からのお客様をもてなす大学教授もいる。本当に様々なオーディエンスがいる。ツーリストたちも、その場所の意味も、一枚岩ではないのである。それぞれには、それぞれのニュー・セイラムがあるのだ (Bodnar 1992)。ツーリストたちは自分たちにとって意味のある過去を構築し、自分たちの生活や経験に結びつけていく。こうして、その場所で意味が構築されるのである。

このように意味を創りあげる上で、そのプロセスを促進しているのは、あちらこちらをまわるツーリストたちと解説者たちが織りなす対話や相互作用である。解説者たちはリンカーンや、1830年代のこの村のことや、もとい住民たちの歴史について話しをするが、その際ツーリストたちは解説者に質問したり、彼らと相互作用を行ったりできる。確かにミュージアムの専門家たちはオリエンテーション・ビデオやパンフレットを用いて、リンカーンの変身の地としてニュー・セイラムをめぐるメッセージを発信しており、ツーリストたちも、その主要なメッセージを受けとっている。しかし解説者たちとの関係は、もっと個人的で直接的なものである。解説者もまた、主にトレーニングやマニュアルで、その場所に関するオフィシャルなメッセージを受け取っているが、彼らはしばしば、そういったオフィシャルなものから離れ、彼ら自身のものへ変換していつているのだ<sup>12</sup>。すでに見たように、ツーリストたちも彼らの関心を相互作用に持ちこんでくる。その結果、レクチャーというよりディスカッションのようなオープンなかたちが生まれ、それによって即興 (improvisation) が行なわれ、構築主義的なプロセスが促進されていくのである。

研究の多くはツーリストたちの探求というシリアスな面だけを強調しているが、こういった相互作用の多くは陽気なものである<sup>13</sup>。解説するガイドと訪問客の相互作用は、歴史的な事実の発見ばかりではなく、愉快なものともなっている。たとえばプリマスにある再建されたメイフラワー号を見に行った時のこと、筆者は当時の服装をした女性のガイドと出会った。彼女は一人称で話しをし、大海原を渡ることがどんなに大変だったかを語り、その航海で主人を喪ってしまい、この広い新大陸でたった一人っきりののだと切々と私に話してくれた。そうして後で彼女は私を真っ直ぐ見て、なんとウィンクしてくれたのである。筆者には、このウィンクが1620年代のものか1990年代のものか分からなかった。多くの場合、ニュー・セイラムの解説者たちは冗談をまじえ訪問客とふざけ合っている。当時の服装を着た女性店員は集まったツーリストたちに、「今日は何を買いに来たの?」と言う。そうして、その質問を投げかけることで、話し方も三人称から一人称へと変わり、店で売られている品物や1830年代の値段についてユーモラスな会話が行われ、いかに今日の値段と比べそれが安いのかを知るのである。こうした状況下では、多くのツーリストた

ちは、時代の枠組にそって演技をし、別の異なった現実を体験している。それが過去を学ぶうえで良い方法となるだろう。訪問客たちは娯楽を経験し楽しむのだ。

フィールドワークでは、ときに一つの場所にとどまって、新たなツーリスト一行がやって来るたびに会話のトピックがいかに変化していくのかを観察することがある。また、あるグループにずっとついてまわり、彼らの言説や役割がそれぞれの場所へ行くたびにいかに異なるのかを観察したりもする。ツーリストや解説者の役割は固定していない。ツーリストにすぎなかったある母親は、彼女の子どもにニュー・セイラムのことを説明したりもするが、そのとき彼女はある意味、解説者となっており、役割を転換している。一人をとってみても、その一回きりの訪問においてでさえ、主観性 (subjectivities) や動機 (motives) は変化するである。

人はそれぞれ自分の意味を構築するが、そこにはパターンや一般化も明らかに行ないうるのであろう。ニュー・セイラムがツーリストたちにとって有する意味を考察した本稿において、ここでの知見はあくまで仮説的なものであるものの、ツーリストたちは自分自身の意味を構築している。ただ、これについてももう少し考察する必要がある。そのため、過去を学び、この場所を楽しむことに加え、以下3つの主要なテーマを述べておきたい。

第一に、ニュー・セイラムにやって来るツーリストたちは、ノスタルジアを消費する。すなわち機械文明の物質主義と対比して、ハンドクラフトの、その地域で造られた製品を消費するのである。彼らツーリストたちがその村に対して、ノスタルジアの感覚をもって見ているのは、失われていく過去、生活が今よりもナチュラルで、ピュアで、シンプルであった想像の時代—実際、中西部におけるエデンの園とも言うてよいものである。多くの人びとはニュー・セイラムにおいて、大草原の開拓者たちの生活のイメージを投影しており、イリノイに最初に住んでいた住民たちが戻ってきたかのように感じている。こうしたツーリストにとって、ニュー・セイラムはイリノイの起源を記す神話、大草原のパストラルなのである。

第二に、訪問客が村をまわるにつれて、彼らは進歩のアイデアを購買する。すなわち彼らは、自分たちがどれほど進歩したのかという感慨を購買するのである。解説者も繰り返し、生活がつかった1830年代に戻りたいかどうか聞くのである。答えはひとしくノーだ。進歩のテーマは、ニュー・セイラムの言説にあって主要なテーマとなっている。1830年代の生活の大変さと1990年代の生活の便利さが、つねに対比され強調されているのだ。しかし上で述べた2つのテーマは、決して対立するものではない。ノスタルジアという第一のテーマが過去における生活のシンプルさを描いているのに対して、進歩という第二のテーマはその生活のつらさを描きだしている。第一のものにあってテクノロジーは悪だが、第二のものでは進歩である。訪問客は両方の見方を同時に持っているのだ。想像上では彼らはシンプルな生活を切望している。しかし彼らは、現代の1990年代の便利さを欲しており、1830年代の生活を手に入れるために、1990年代の生活を手放す気はないのである。

最後に、ツーリストたちは伝統的なアメリカの賛美を購買する。それは、誠実さ、良き隣人、懸命な労働、美德と寛容、サクセス・イデオロギー、アメリカの小さな街に見られたコミュニティの感覚などである。ツーリストたちはニュー・セイラムで、1990年代の自分たちの生活を振りかえらせてくれる言説を探している。ニュー・セイラムや類似した場所は、あるイデオロギーをつくりだし、起源となる神話を再創造し、歴史を生き生きとしたものとし、ツーリストたちを神話的集合意識に結びつけ、過去を商品化する。ツーリストたちが創造／想像する特定の過去は、決して存在しなかったものであるが、ニュー・セイラムのような歴史の名所は、アイデンティティの感覚、意味、愛着や安定性を構築する素材 (経験) をまさに与えてくれる。BaudrillardやEcoが描くアメリカでは、コピーはただそれ自体で自存しているのであって、いかなる起源となる神話もあり得ず、もちろん集合的リアリティも存在しないことになる。しかしな

がら、それは彼らが考えたアメリカに過ぎないのであり、日常的実践のもとにあるアメリカではないのである。

Zipes (1979) によれば、ニュー・セイラムは2つのやり方で読まれるべきだとされる。ひとつは悲観主義的な見方 (Haraway 1984; Wallace 1981) で、ミュージアムや歴史の名所は搾取をするもの、階級を強化するもの、欺くもの、虚偽意識によるもの、疎外された存在の想像力を操作するものと見なされる。もうひとつは楽観主義的な見方で、変身に向けたユートピア的な可能性に焦点が当てられる。それは、より良い生活へと希望をあたえ、自己や自己の文化を変容させてくれるものだ。Zipes (1979: 119) の描写するところでは、アブラハム・リンカーンのストーリーは、「豚飼いがプリンスになるという民話のモチーフ」に沿ったもので、こうしたファンタジーには革命的な可能性があるということだ。それは英雄的で、これによって社会生活と大きな部分でコンタクトがとれるかもしれないのだ。この点でファンタジー、アート、歴史の名所は同様の機能を持っているのである。

ポストモダンの理論家たちの研究では、アメリカの観光地はポストモダン理論が言う要素をまさになぞっているかのように描きだされ、その場所がオーセンティックでなく創りだされたことや、大衆にのみアピールすること、さらには過去のイミテーションを創りだしていることが強調されている。しかし、これは限られた、しかもゆがんだ見方であろう。そうした見方をしてしまうと、アメリカの風景にそういった場所が一般的に、しかもたびたび見出し得ることが説明できなくなってしまうし、そこへ行く人びとに対してその場所が有する意味をごまかすことになってしまうだろう。そればかりではなく、アメリカのポピュラー・カルチャーや大衆的観光地をこのようにおとしめることで、自己の前提に無頓着なエリートの政治的鈍感さを露呈してしまうことにもなりかねないのである。

#### [謝辞]

まずS. Taylorの助言と友情に感謝する。またRobert Johannsen、Jean-Philippe Mathy、Norman Denzin、1992年度の私のツーリズム・ゼミの学生たちも、私に有益な批判をしてくれた。さらにChritina Hardwayはこのプロジェクトのために、大変はたらいてくれた。そしてヒューレット助成プログラム、イリノイ大学文化的価値・倫理研究センターにも感謝したい。本稿は、ウィスコンシン大学、シカゴ大学、ヴァージニア大学の文化人類学部にて発表したものを修正したものである。さらにはアメリカ文化人類学会の1992年次大会、および1992年11月に開催された「伝統的かつ現代的な国際観光のための会議」でも発表の機会を得ている。

#### [注]

1. オーセンシティティをめぐる関連文献については、Trilling 1972、MacCannell 1976、Handler 1986、Appadurai 1986、Cohen 1988、Morris 1988、Handler and Saxton 1988、Kirsheblatt-Gimblett and Bruner 1989、Bruner 1993aなどを参照。
2. われわれが講読してきた理論を確めるためフィールドへ行こうというゼミの学生たちの提案にしたがって、クラスは1988年4月、ニュー・セイラムへ行った。私自身にとっても、それが初めての訪問であった。筆者はすぐその場所に魅了され、そのシーズンそこへと再び戻ってきたのである。そうして1989年と1990年の夏、ニュー・セイラムでずっと過ごしたのだ。頂度、ナショナル・インダウメント・フォー・ザ・ヒューマニティーズ・サマー・スタイペンド (National Endowment for the Humanities Summer Stipend) やイリノイ大学リサーチボードからフィールドワークのために財政的支援を得ることもできていた。ニュー・セイラムの歴史や若い頃のアブラハム・リンカーンについて図書館で調べる時間以外は、参与観察やインタビューをして過ごした。

3. 解説者が1830年代のことを語るのは三人称においてであるが、一人称では1830年代の仮面をかぶり、その時代の枠組で話しをする。
4. 再建された村、歴史の名所、テーマパーク、美術館をめぐる関連文献については、Wallace 1981、Anderson 1984、Schechner 1985、Lowenthal 1985、Dorst 1989、Karp and Lavine 1991、Gable et al. 1992、Willis 1993を参照。
5. オンストットの家は、ニュー・セイラムからピーターズバーグに移り、再建後ニュー・セイラムに戻ってきたが、オリジナルのものである。ニュー・セイラムの解説ガイドは、このことを訪問客に指摘する。
6. このパラグラフは、Taylor and Johnson (1993) に拠っている。彼らは、ニュー・セイラムのプログラムを運営するイリノイ州当局の部局の一つであるイリノイ歴史保存局で働く歴史家である。
7. オーセンティシティには4つの意味しかないとは筆者は主張するつもりはない。そうではなく、この4つの意味がフィールドワークから得られたということだ。ほかの意味も、もちろんあるだろう（オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリーを参照）。たとえば、ある物が偽造品であるという場合、ある物はオーセンティックではなく、オリジナルと偽って、あるいは誤って提示されたものだけということである。その際、オーセンティックであるのは、ある物が実際に、公表通りのものであるといった意味になろう。
8. ニュー・セイラムの管理人に筆者の知見を示した後で、彼が言うには、本稿で提起した問題を考えたこともないが、そうした問題は自分にとっても大切だということであった。それこそが、当然だとされていたことを見破っていくことになるだろう。
9. これは仮名である。
10. 本稿における筆者の批判は、Handler (1986)、Handler and Saxton (1988) に向けられているのであって、Handler and Linnekin (1984) に向けられるものではない。また、Eric Gableが行なったコロニアル・ウィリアムズバーグの研究にも向けられてはいない。これと同様、私はMacCannell 1976を批判しているが、MacCannell 1992を批判してはいない。
11. 観光研究に関するこうした立場に対する批判をめぐる関連文献については、Van den Abbeele 1980、Goldberg 1983、Cohen 1988、Moris 1988、Bruner 1989および1991などを参照。
12. Gable and Handler (1993) はコロニアル・ウィリアムズバーグで同様の観察を行なっている。
13. 例外としては、Schechner 1985およびCohen 1988がある。

#### <参考文献>

Anderson, Jay

1984 Time Machines: The World of Living History. Nashville: American Association for State and Local History.

Appadurai, Arjun, ed.

1986 The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective. Cambridge: Cambridge University Press.

Atherton, Lewis B.

1939 The Pioneer Merchant in Mid-America. New York: Da Capo Press.

Babcock, Barbara

1990 By Way of Introduction. In Inventing the Southwest. Special Issue, Journal of the Southwest 32(4):383-437.

Basler, Roy P.

1935 The Lincoln Legend: A study of Changing Conceptions. Boston: Houghton Mifflin.

Baudrillard, Jean

1983 *Simulations*. New York: Semiotext(e).

1988 *America*. London: Verso.

Bauman, Richard

1992 Performance. In *Folklore, Cultural Performances, and Popular Entertainments*. Richard Bauman, ed. Pp. 41-49. New York: Oxford University Press.

Bodnar, John

1992 *Remaking America: Public Memory, Commemoration, and Patriotism in the Twentieth Century*. Princeton: Princeton University Press.

Boorstin, Daniel

1961 *The Image: A Guide to Pseudo-Events in America*. New York: Harper Row.

Borofsky, Robert

1987 *Making History: Pukapukan and Anthropological Constructions of Knowledge*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bruner, Edward M.

1973 The Missing Tine of Chicken: A Symbolic Interactionist Approach to Culture Change. *Ethos* 1(2):219-238.

1984 [ed.] *Text, Play and Story: The Construction and Reconstruction of self and Society*.

1983 *Proceedings of the American Ethnological Society*. Washington, DC: American Anthropological Association.

1989 On Cannibals, Tourists, and Ethnographers. *Cultural Anthropology* 4:438-445.

1991 The Transformation of Self in Tourism. *Annals of Tourism Research* 18(2):238-250.

1993a Epilogue: Creative Persona and the Problem of Authenticity. In *Creativity / Anthropology*. Smadar Lavie, Kirin Narayan, and Renato Rosaldo, eds. Ithaca: Cornell University Press.

1993b New Salem as a Contested Site. *Museum Anthropology* 17(3):14-25. Special issue on Museums and Tourism edited by Edward M. Bruner.

Cohen, Erik

1988 Authenticity and Commoditization in Tourism. *Annals of Tourism Research* 15(3):371-386.

Derrida, Jacques

1974 *Of Grammatology*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.

Dorst, John D.

1989 *The Written Suburb: An American Site, an Ethnographic Dilemma*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Eco, Umberto

1986 *Travels in Hyperreality*. In *Travels in Hyperreality: Essays*. Pp. 3-58. San Diego: Harcourt Brace Jovanovich.

Gable, Eric, and Richard Handler

1993 Colonialist Anthropology at Colonial Williamsburg. *Museum Anthropology* 17(3):26-31.

Gable, Eric, Richard Handler, and Anna Lawson

1992 On the Uses of Relativism: Fact, Conjecture, and Black and White Histories at Colonial Williamsburg. *American Ethnologist* 19(4):791-805.

Geertz, Clifford

1986 Making Experience, Authoring Selves. In *The Anthropology of Experience*. Victor Turner and Edward M. Bruner, eds. Pp. 373-380. Urbana: University of Illinois Press.

Goldberg, A.

1983 Identity and Experience in Haitian Voodoo Shows. *Annals of Tourism Research* 10(4):479-495.

Handler, Richard

1986 Authenticity. *Anthropology Today* 2(1):2-4.

Handler, Richard, and Jocelyn Linnekin

1984 Tradition, Genuine or Spurious. *Journal of American Folklore* 97 (385):273-290. Handler, Richard, and Jocelyn Linnekin

1984 Tradition, Genuine or Spurious. *Journal of American Folklore* 97 (385):273-290. Handler, Richard, and William Saxton

1988 Dyssimulation: Reflexivity, Narrative, and the Quest for Authenticity in "Living." *Cultural Anthropology* 3(3):242-260.

Hanson, Allan

1989 The Making of the Maori: Cultural Invention and Its Logic. *American Anthropologist* 91(4):890-902.

Haraway, Donna

1984 Teddy Bear Patriarchy: Taxidermy in the Garden of Eden, New York City, 1908-1936. *Social Text* 11: 20-64.

Herndon, William H., and Jesse William Weik

1889 *Herndon's Lincoln: The Story of a Great Life*. Chicago: Belford, Clarke.

Hobsbawm, Eric, and Terence Ranger, eds.

1983 *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge University Press.

Huxtable, Ada Louise

1992 Inventing American Reality. *The New York Review of Books*, December 3, pp. 24-29.

Hymes, Dell

1975 Folklore's Nature and the Sun's Myth. *Journal of American Folklore* 88:345-369.

Illinois Historic Preservation Agency

n.d. *Lincoln's New Salem*. Brochure distributed at New Salem Historic Site, Springfield, IL.

Karp, Ivan, and Steven Lavine

1991 *Exhibiting Culture: The Poetics and Politics of Museum Display*. Washington, DC: Smithsonian.

Kirshenblatt-Gimblett, Barbara, and Edward M. Bruner

1989 Tourism. In *International Encyclopedia of Communications*, Vol. 4. Pp. 249-253. New York: Oxford University Press.

Kwedard, Melinda F., John A. Patterson, and James R. Allen

1980 Interpreting 1830s Storekeeping in New Salem, Illinois. Report submitted to the National Endowment for the Humanities, July 1.

Lavis, Smadar, Kirin Narayan, and Renato Rosaldo, eds.

1993 *Creativity / Anthropology*. Ithaca: Cornell University Press.

Lowenthal, Richard



- 1985 *The Past is a Foreign Country*. Cambridge: Cambridge University Press.
- MacCannell, Dean
- 1976 *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*. New York: Schocken.
- 1992 *Empty Meeting Ground: The Tourist Papers*. London: Routledge.
- Morris, Meaghan
- 1988 At Henry Parkes Motel. *Cultural Studies* 2(1):1-47.
- Neeley, Mark E., Jr.
- 1982 *The Abraham Lincoln Encyclopedia*. New York: McGraw-Hill.
- Onstot, T.G.
- 1902 *Pioneers of Menard and Mason Counties*. Forest City, IL: T.G. Onstot.
- Peoria Journal
- 1936 Speed 'Aging' at New SaLem, *Peoria Journal*, June 19, p.4.
- Reep, Thomas P.
- 1927 *Lincoln at New Salem*. Chicago: Old Salem Lincoln League (Petersburg, IL).
- Sandburg, Carl
- 1954 *Abraham Lincoln: The Prairie Years and the War Years*. San Diego: Harcourt Brace Jovanovich.
- Schechner, Richard
- 1985 *Restoration of Behavior*. In *Between Theater and Anthropology*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Taussig, Michael
- 1993 *Mimesis and Alterity. A Particular History of the Senses*. New York: Routledge. Taylor, Richard S., and Mark L. Johnson
- 1993 *Inventing Lincoln's New Salem: The Reconstruction of a Pioneer Village*. Unpublished MS.
- Thomas, Benjamin P.
- 1934 *Lincoln's New Salem*. Springfield: Abraham Lincoln Association.
- Trilling, Lionel
- 1972 *Sincerity and Authenticity*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Turner, Victor, and Edward M. Bruner, eds.
- 1986 *The Anthropology of Experience*. Urbana: University of Illinois Press.
- Van den Abbeele, Georges
- 1980 Sightseers: The Tourist as Theorist. *Diacritics* (December) 10:2-14.
- Wagner, Roy
- 1975 *The Invention of Culture*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Wallace, Michael
- 1981 Visiting the Past: History Museums in the United States. *Radical History Review* 25:63-96.
- Whisnant, David
- 1983 *All That is Native and Fine: The Politics of Culture in an Appalachian Region*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Willis, Susan, ed.
- 1993 *The World According to Disney*. Special issue of *South Atlantic Quarterly*, Vol. 92, Iss. 1.

Zipes, Jack

1979 Breaking the Magic Spell: Radical Theories of Folk and Fairy Tales. Austin: University of Texas Press.

【訳注】

\* 1. 本稿は、Bruner, E.M., 1994, "Abraham Lincoln as Authentic Reproduction: A Critic of Postmodernism," American Anthropologist, 96(2): 397-415.の全訳である。エドワード・M・ブルーナーは現在、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校文化人類学部名誉教授（Professor Emeritus at the Department of Anthropology in University of Illinois at Urbana-Champaign）であるが、「構築主義」的な立場から観光研究を展開し、非常に重要な数多くの業績を生みだしている。そのうちのいくつかを、以下に列挙してみよう。

- ① Bruner, E.M., 1989, "Of Cannibals, Tourists, and Ethnographers," Cultural Anthropology, 4(4): 438-445. [翻訳中]
- ② Bruner, E.M., 1989, "Tourism, Creativity, and Authenticity," Studies in Symbolic Interaction, 10: 109-114. [翻訳中]
- ③ Bruner, E.M., 1991, "Transformation of Self in Tourism," Annals of Tourism Research, 18(2): 238-50. [翻訳中]
- ④ Bruner, E.M., 1994, "Abraham Lincoln as Authentic Reproduction: A Critic of Postmodernism," American Anthropologist, 96(2): 397-415. [本稿]
- ⑤ Bruner, E.M. and Barbara Kirshenblatt-Gimblett, 1994, "Maasai on the Lawn: Tourist Realism in East Africa," Cultural Anthropology, 9(2): 435-470.
- ⑥ Bruner, E.M., 1996, "Tourism in Ghana: The Representation of Slavery and the Return of Black Diaspora," American Anthropologist, 98(2): 290-304.
- ⑦ Bruner, E.M., 1999, "Return to Sumatra: 1957, 1997," American Ethnologist, 26(2): 461-477.

この他にもなお、多くの論稿を挙げうるが、これらに共通しているのは、エスノグラフィックな「実証的思考」と抽象的な「理論的思考」がみごとに融合し合い結晶化していることである。こうしたことは観光研究にかぎらず、社会科学の目指すべき一つの形であり、その意味でもブルーナーの論稿を漸次、翻訳していくことが重要であると考えている。

\* 2. イリノイ州の大都市としては、シカゴが有名であるが、シカゴは州都ではない。イリノイ州の州都はスプリングフィールドである。ここは、シカゴからクルマで南へ4～5時間、ニュー・セイラムから南へ1時間程度走った所に位置しているが、州の議事堂が静かな町並みの中に佇んでいる。またここは、かつてリンカーンが法律事



写真3 リンカーン旧居



写真4 スプリングフィールドの町並み

務所を開いていたところで、彼が家族と過ごした旧居やリンカーンの墓等もあり、ニュー・セイラムと同じく、多くの観光客たちが訪れている。そういった意味で、このスプリングフィールドも観光研究において興味深い地域と言えるだろう。さらにまた、訳者は観光研究においてシカゴを考察する必要性も強く感じている。シカゴ学派に代表されるごとく、この地域は都市研究において多くの蓄積を有するが、**観光という視点からこの地域の都市性をとらえかえすことが重要となるように思われるのである**。訳者はこの視点からの研究を現在、準備中である。

- \* 3. コロニアル・ウィリアムズバーグは、バージニア州東部に位置しており、州都リッチモンドから約100キロメートルの所に位置している。『地球の歩き方 88 アメリカ南部 2000～2001版』では、以下のように紹介されている。「この町はイギリス植民地時代の州都であったが、アメリカ独立以後から20世紀前半までバージニア州の小さな町の一つにすぎなかった。しかし、この歴史的な町並みをなんとか保存できないだろうか、と考えた人がいた。…1926年のことである。……そして、ウィリアムズバーグは蘇り、コロニアル・ウィリアムズバーグとして、多くの観光客が訪れるバージニアの観光客・スポットとなった。ここは18世紀の町並みを復元した巨大な歴史博物館であり、その中で人々が当時のままの生活を送っている”Living Museum（生きた博物館）”でもあるのだ」（『地球の歩き方 88 アメリカ南部 2000～2001版』：274）。
- \* 4. ベリー＝リンカーン・ストアには、第一と第二の2つがある。

#### [訳者謝辞]

訳者がイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校文化人類学部に1999年8月から2000年7月まで客員研究員として滞在していた間、ブルーナー先生には多くのご指導を頂いた。本稿でも展開されている、観光研究における「構築主義」の理論的立場に対して、訳者はシンパシーを感じており、自分自身もこの立場から研究を行なっている。そのためイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校において、先生のご指導を仰いだわけである。

私にとって先生は、「優しい声」として記憶されている。アメリカに着いてすぐ、文化人類学部の建物で初めて待ち合わせをさせて頂いた折、学部の古い建物の翳のなか先生は逆光の陽を背にして姿をあらわされ、「Hi」と少しシャイに、しかしとても優しい声で話しかけてこられた。そのため先生の容姿よりむしろ、その「優しい声」が印象に残ってしまった。

そのとき先生の研究室で「このアメリカで何がやりたいのか」と聞いてくださり、つたない英語で私がこたえるのに対し、本当に一生懸命、耳を傾けてくださった。帰り際、先生は「あなたがいろいろ、やりたいことがあるのはとても分かったし、それについてできるだけ協力しよう。でもまず、あなたがやるべきことは英会話だね」と言われ、お互い苦笑したことが昨日のここのように思い出される。

その後、先生は私を文化人類学部で開催されているワークショップにも誘って下さるなど、ことあるごとに気にかけて下さった。帰国間際、私はお礼をいうために研究室を訪ね、どんな結果をアメリカでだせ、日本に帰って何がしたいのか、そして先生の論文を翻訳していきたい旨もあわせてお伝えした。そうして腰をあげようと思ったとき、ふと「あなたがやるべきことは英会話だ」と言われたことを思い出し、「いま私の英語はどうですか」と聞いてみた。すると先生は微笑まれ、一言やはりあの「優しい声」で、「Very Good」とおっしゃった。それが私にとって、1年にわたる滞米中の成果を象徴しているように感じられ、とても嬉しくなったのを覚えている。

この場を借りて、先生の様々なご指導・ご助言にお礼を申し上げます。

～I would like to thank Professor Bruner for his warmhearted help and very useful academic advices.～